

旺文社文庫

暗 夜 行 路

志賀直哉著



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやすくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

赤尾好夫

〔編集顧問〕 伊藤 整 茅 誠司 木村 毅
(五十音順) 塩田良平 中島健蔵 森戸辰男

旺文社文庫

暗 夜 行 路

270 円



昭和 40 年 11 月 10 日 初版発行
昭和 44 年 6 月 1 日 重版発行

著 者	志 賀 直 哉
発行者	烏 居 正 博
印刷所	株式会社 厚 徳 社

落丁・乱丁・不良本はお取
書店または本社に直接お申

旺文社文庫

暗 夜 行 路

志賀直哉著

旺文社

目次

暗夜行路

前編 序詞

第一

第二

後編 第三

第四

解説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

人間弁護の書

志賀直哉のこと

代表作品解題

参考文献

年譜

高田瑞穂

谷川徹三

武者小路実篤

挿絵 緑川広太郎

五

七

一九

一三一

二四七

三九三

五二三

五二三

五二三

五二九

五三八

五四二

五四六

五四九

五五〇

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

暗^{あん}

夜^や

行^{こう}

路^ろ

前

編

武者小路実篤兄にささぐ

序

詞

（主人公の追憶）

私が自分に祖父のあることを知ったのは、私の母が産後の病気で死に、その後ふた月ほどたつて、不意に祖父が私の前に現われて来た、その時であった。私の六つの時であった。

ある夕方、私は一人、門の前で遊んでいると、見知らぬ老人がそこへ来て立った。目の落ちくぼんだ、猫背のなんとなく見すばらしい老人だった。私はなんということなくそれに反感を持った。

老人は笑顔を作って何か私に話しかけようとした。しかし私は一種の悪意から、それをはぐらかして下を向いてしまった。釣り上がった口もと、それを囲んだ深いしわ、変に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でそう思いながら、なお意固地に下を向いていた。

しかし老人はなかなかその場を立ち去ろうとはしなかった。私は妙に居たたまらない気持ちになって来た。私は不意に立ち上がって門内へ駆け込んだ。その時、

「オイオイお前は謙作かネ」と老人が後ろから言った。

私はその言葉で突きのめされたように感じた。そして立ち止まった。振り返った私は心では用心していたが、首はいつかおとなしくうなずいてしまった。

「おとうさんは在宅かネ？」と老人がきいた。

私は首を振った。しかしこのうわ手な物言いが変に私を圧迫した。

老人は近寄って来て、私の頭へ手をやり、

「大きくなった」と言った。

この老人が何者であるか、私にはわからなかった。しかしある不思議な本能で、それが近い肉親であることをすでに感じていた。私は息苦しくなって来た。

老人はそのまま帰って行った。

一二三日するとその老人はまたやって来た。その時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

さらに十日ほどすると、なぜか私だけがその祖父の家に引きとられることになった。そして私は根岸のお行の松に近いある横丁の奥の小さい古家に引きとられて行った。

そこには祖父のほかにお栄という二十三四の女がいた。

私の周囲の空気はまったく今までとは変わっていた。すべてが貧乏くさく下品だった。

ほかの同胞が皆自家に残っているのに、自分だけがこの下品な祖父に引きとられたことは、子供ながらにおもしろくなかった。しかし不公平には幼児から慣らされていた。今に始まったことでないだけ、なぜかを他人にきく気も私には起こらなかった。しかしこういうふうにして、こんなことが、これからの生涯にもたびたび起こるだろうという漠然とした予感が、私の気持ちをさびしくした。それにつけても私は二か月前に死んだ母をおもい、悲しい気持ちになった。

父は私に積極的につらく当たることにはなかったが、常に常に冷たかった。が、このことには私はあまりに慣らされていた。それが私にとって父子関係の経験としての全体だった。私はほかの同胞の同じ経験をそれに比較するさえ知らなかった。それゆえ、私はそのことをそう悲しくは感じなかった。

母はどちらかと言えば私には邪慳だった。私はことごとくにしかられた。実際私はきかん坊でわがままでもあった。が、同じことが他の同胞ではしかられず、私の場合だけではしかられるようなこと

(1) 根岸は、明治から大正にかけて文人たちが多く住んだ東京台東区の町名。お行の松は時雨の松ともいわれた有名な大木。

とがよくあった。しかし、それにもかかわらず、私は心から母を慕い愛していた。

四つか五つか忘れた。とにかく、秋の夕方のことだった。私は人々が夕餉ゆうぐのしたくでせわしく働いているすきに、しも手洗場ちようずばの屋根へ掛け捨てであった梯子はしどからだれにも気づかれずに一人、母屋の屋根へ登って行ったことがある。棟伝むねつたいに鬼瓦おにがわらの所まで行って馬乗りになると、変に快活な気分になって、私は大きな声で唱歌をうたっていた。私としてはこんな高い所へ登ったのは初めてだった。ふだん下からばかり見上げていた柿かきの木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕ばえている。鳥からすがせわしく飛んでいる……

まもなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでいるのに気がついた。それは気味の悪いほど優しい調子だった。

「あのネ、そこにじっとしているのよ。動くのじゃ、ありませんよ。今山本が行きますからネ。そこにおとなしくしているのよ」

母の目は少し釣り上がって見えた。ひどく優しいだけただごとでないことが知れた。私は山本の来るまでに降りてしまおうと思った。そして馬乗りのまま少しあとじさった。

「ああっ！」母は恐怖から泣きそうな表情をした。「謙作はおとなしいこと。おかあさんの言うことをよくきくのネ」

私はじっと目を放さずにいる、変に鋭い母の視線から縛しばられたようになって、身動きができなくなった。

まもなく書生と車夫との手で私は用心深くおろされた。

案のじよう、私は母からはげしく打たれた。母は興奮から泣きだした。

母に死なれてからこの記憶は急にはっきりして来た。後年もこれを思うたび、いつも私は涙を誘われた。なんといつても母だけはほんとうに自分を愛していてくれた、私はそう思う。

前後はわからない。が、そのころに違いない。

私は一人茶の間で寝ころんでいた。そこに父が帰って来た。父は黙って、袂たもとから菓子もちの紙包みを出し、茶簞ちやたんすの上うへに置いて出て行った。私は寝たまま、じろじろそれを見ていた。

父がまたはいって来た。そして、今度は紙包みを戸棚とだなの奥へしまい込んで、出て行った。私はむっとした。気分が急に暗くなった。まもなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持って、次の間へはいって来た。私にはわがままな気持ちきもちがむやみと込み上げて来た。泣きたいような、おこりたたいような気持ちきもちだった。

「かあさん、お菓子」

「何を言うんです」母は言下げんかにしかった。その少し前に私はその日のおやつをもらっていたのだ。

「何か。よう、何か」

母は応じなかった。そして、たたんだ着物を簞たんすへしまつて出て行こうとした。

私は起き上がって、

「よう、何か」こういって、母の前へ立ちふさがった。母は黙って私の頬ほおをぐいといつねった。私はおこってその手をピシヤリと打った。

「もう食べたじゃ、ありませんか。なんです」母は私をにらんだ。
私は露骨に父の持って帰った菓子をせびりだした。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は権利をでも主張するように頑固に首を振った。なにしろ、私は気持ちがクシャクシャしてかなわなかった。その菓子がそれほど食いたいのではない。とにかく、思い切り泣くか、おこられるか、打たれるか、何かそんなことでもなければ、どうにも気持ちが変えられなくなっていた。

母は私の手を振り払って、出て行こうとした。私は後ろから不意に母の帯へ手をかけ、ぐいと力いっぱい引いた。母はよろけて障子につかまった。その障子はずれた。

母は本気でおこりだした。そして、私の手首をつかみ、ぐんぐん戸棚の前へ引っぱって行った。母は片腕で私の頭をかかえておいて、いやがる私の口へその厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食

いしばっているみそっ歯の間から、羊羹が細い棒になってはいって来るのを感じながら、私は度胆を抜かれて、泣くこともできなかった。

興奮から、母は急に泣きだした。しばらくして私もはげしく泣きだした。

根岸の家ではすべてが自堕落だった。祖父は朝起きると楊子をくわえて銭湯へ出かけた。そして帰るとその寝間着姿で朝餉の膳に向かった。

来る客も変わったいろいろな種類の人間が来た。ことに花合戦をする、その晩には妙な取り合わ

世の人々が集まって来た。大学生、それから古道具屋、それから小説家(?)、それから山上^{やまかみ}さんとみんなが言っている五十余りのちよつと未亡人らしい女などであった。この女はそのころの医者が持ったような小さい黒皮の手さげ鞆^{かばん}を持って来た。それには、きまってたくさん小銭と、ひとそろいの新しい花札と太い金縁^{きんぶち}のめがねとがはいっていたそうである。しかしこの女は未亡人ではなく、そのころ大学で歴史を教えていたある年寄った教授の細君で、この女の甥^{おい}がかつてお栄と同棲^{どうせい}していた、その縁故^{えんこ}で、夫に隠れて好きな遊び事のために来たのだということである。その甥という男は大酒飲みで、葉巻のみで、そして骨までしみとおった放蕩者^{ほうとうもの}で、とうとうその二三年前にほとんどあきらかな原因なしに自殺してしまったということをお栄から聞いた。

山上という女は十時ごろにはたいがい帰って行った。するとそのころになって、東京者のくせに大阪弁ばかり使う若い寄席^{よせげい}芸人がよく仲間へはいりに来た。

お栄は勝負にははいらなかったが、祖父の勝敗にはたぶん実際上の気持ちから、よくやきもきして口出しをしていた。そういう時、いつも下品な皮肉を言ってみんなを笑わせるのはその寄席芸人であった。

後年私は、なぜそれほど、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたろうと、よく考えた。月々困らぬだけの金は父から来ていたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の売り買いをしたり、がらくた道具屋の競売^{せりうり}に家を貸^いして席料を取ったりした。もうけずく以上、祖父の趣味のようにも思えた。

お栄はふだん少しも美しい女ではなかった。しかし湯上がり濃い化粧^{けしょう}などすると、私の目にはそれが非常に美しく見えた。そういう時、お栄は妙に浮き浮きとすることがあった。祖父と酒を飲

むと、そのころの流行歌を小声でうたったりした。そして、酔うと不意に私をひぎへ抱き上げて、力のある太い腕で、じっと抱き締めたりすることがあった。私は苦しいままに、何かしら気の遠くなるような快感を感じた。

私は祖父をしまいまで好きになれなかった。むしろきらいになった。しかしお栄はだんだんに好きになっていった。

根岸の家へ移って半年余りたったある日曜日か祭日かのことであった。私は久しぶりに連れられて、本郷の父の家へ行った。ちょうど兄は書生と目黒のほうへ遠足に行つて、咲子というまだ一年にならぬ赤子とそして父だけが家にいた。

祖父といっしょに父の居間に挨拶に行くと、その日父は珍しくきげんがよかった。父はいつになく愛想らしいことを私に言った。父としてはそれは氣まぐれだった。何かその日気分がいいことがあったのかもしれない。しかしそんなことは私にはわからなかった。私は何かしら惹かれるような心持ちで、祖父が茶の間へ引きかえしてから、一人そこに残っていた。

「どうだ、謙作。ひとつ角力をとろうか」父は不意にこんなことを言い出した。私はおそらく顔いっぱいうれしさを現わして喜んだに違いない。そしてうなずいた。

「さあ、来い」父はすわったまま、両手を出して、かまえた。

私は飛び起きざまに、それへ向かつて力いっぱい、ぶつかって行った。

「なかなか強いぞ」と父は軽くそれを突き返しながら言った。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、またぶつかって行った。